

大阪は「まち」がほんまにおもしろい

上田秋成と怪異譚「雨月物語」の原点を訪ねて

～香具波志神社から神崎川、遊女宮城の塚まで～

「雨月物語」や「春雨物語」で知られる上田秋成と加島のまちは深い関わりがあり、コースでは加島の歴史に触れるとともに、香具波志神社から遊女塚まで、秋成の人生や作品を語る際に切り離すことのできないスポットを巡ります。



◎加島

延暦4年(785)に桓武天皇が摂津大夫・和氣清麻呂に命じた三国川(神崎川)の開削が行われて以来、加島の地は、神崎・江口とともに、西国から長岡京・平安京への河川交通の要衝として賑わいを見せ、また、遊女の里として「天下第一の楽地」と評されるほど繁昌しました。加島の地は平安時代頃から交易や物資集散の要衝地となり、商業活動が盛んに行われました。賀島荘内に美六市(みろくいち)という定期市が置かれていましたが、これは摂津国で市の置かれた最も早い例の一つであると言われています。『摂津名所図会』には、かつては「加島鍛冶千軒」と言われる程、鍛冶職人が集住していたことが記されており、農具や兵具が評判であったようです。加島に銭座が設けられたのも、鍛冶職人の技術が必要とされたからであると思われます。

◎上田秋成

上田秋成は、享保19年(1734)に曾根崎村で生まれ、元文2年(1737)に紙油商・嶋屋を営んでいた上田茂助の養子となりました。幼くして病に罹った秋成を不憫に思った茂助は加島稻荷(香具波志神社)に祈願し、秋成は68歳までの存命を告げられます。秋成は以後、加島稻荷に参詣を続け、68歳になった年、加島稻荷に68首の和歌帖を奉納しました。茂助から継いだ嶋屋が火災に遭って破産した秋成は、加島稻荷の神職方に寄寓し、3年間加島で暮らしました。怪異譚「雨月物語」を上梓した後、左眼に次いで右眼も失明した秋成ですが、その後も「春雨物語」を世に出すなど、現在にまで読み継がれる名作を残して文化6年(1809)にこの世を去りました。加島には上田秋成最古の墓石が安置されています。

1 香具波志神社

創建は天徳3年(959)と言われ、江戸時代まで稻荷大明神や加島神社などと呼ばれてきました。江戸時代の氏子地域は、加島・三津屋・今里・野中・堀上・新在家村に及んでいたそうです。平安から鎌倉時代にかけては連歌殿があり、連歌会が盛んに催されたとされます。境内には楠木正成の三男・楠木正儀が戦勝祈願した際に愛馬を繋いだ「駒繋ぎの楠」や、織田信長登場以前に数年間京を支配した戦国大名・三好長慶が寄進した朱木大鳥居の沓石2個が残されています。万延元年(1860)に社殿は灰燼に帰し、文久3年(1863)に復興しました。現在の社殿は阪神大震災後、建て直されたものです。

2 加島銭座

徳川幕府は、国内の銅生産増大を背景に、寛永13年(1636)に寛永通宝という統一銭貨を鑄造し始め、金・銀に銭を加えた三貨制度を確立しました。近江坂本や江戸を皮切りに全国に数十か所の銭座が開設され、加島には国内銅生産が減少する元文3年(1738)に町人請負方式で銭座が設けられました。元文3年は上田秋成が加島稻荷から68歳までの存命を告げられた年でもあり、秋成の幼少の記憶に銭座が残っていたことでしょう。元文4年(1739)からは銚鉄製の銚銭(すくせん)も鑄造し、銭座は延享2年(1745)まで加島の地にありました。「酒は灘、銭は加島」と称賛される程、加島では高品質な銭貨が鑄造されていました。

4 富光寺(ふっこうじ)

楠木正儀が佐々木秀詮と一戦を交えた際に本陣を置き、不動明王に戦勝祈願したとされます。また、三好長慶が三津屋城を拠点としていた頃、富光寺も支配していた関係から、富光寺の山号・長慶山は三好長慶の名から取られています。法然上人が讃岐配流時に富光寺に一泊し、法話を聞かせたとも言われています。富光寺には丈六の阿彌陀如来像が本尊として安置されています。

3 毛斯倫橋

毛斯倫(もすりん)は羊毛を用いた織物で、ヨーロッパから輸入していましたが、羊毛輸入関税が撤廃された明治29年(1896)に、大阪では毛斯倫紡織株式会社設立されました。日本毛織に次ぐ日本第2の毛斯倫会社であった毛斯倫紡織は大正12年(1923)に加島の対岸である園田村・戸之内に工場を設立し、本社と工場を結ぶ毛斯倫橋を建設しました。後に鐘紡が戸之内工場を引き継いだ後、戦時中は日本国際航空工業の航空機用発動機製造工場となりましたが、昭和20年(1945)に空襲により工場は焼失しました。

6 遊女塚

承元元年(1207)法然が讃岐に配流された際、遊女・宮城が小船に棹さして法然の乗る船に近付き、罪深き人生を懺悔した上で後の世で助かりたい旨を申し出たところ、法然から教え導かれた話が『法然上人絵伝』に載せられていますが、絵伝では神崎ではなく、播磨国・室の泊で起こったこととして記されています。上田秋成は宮城の話モチーフにした「宮城が塚」を『春雨物語』に収めています。作品の中で、自身が加島に暮らしていた頃に塚を探して尋ね歩き、扇を開いた程度の大さの標石を探しに探して見つけたものの、塚と呼ばれる跡はあるかわからない程であり、あわれに思って歌を詠んで手向けた、とあります。

5 神崎橋

神崎橋は南北朝の戦いによって正平17年(1362)に焼け落ち、大正13年(1924)に再び橋が架けられるまでは神崎の渡しがありました。『摂津名所図会』には、かつて神崎川に掬上橋(ゆりあげばし)という橋が架かり、宮城から5人の遊女が入水した際に屍が掬い上げられたことが記されており、その橋はおそらく神崎橋ではないかと言われています。現在の橋は、ジェーン台風で流失した後に再建されたものです。